

信仰座談

信ずるとは

甲 「それであなたのお問いになることがらはどういうことなのか。要点を言うてください。」

乙 「先生、私はいくら聞いても聞かされても、どうもみなさまのような、法悦の生活と申しますか、信仰生活らしい生活ができないのです。それだけでなく、昔はもつと純な感じ易い心だったと思いますが、だんだんと鈍って、そして仕方のない愛想のつきるような私になつてきます。すると私はいよいよじつとしてはいられなくなるのです。しかし聞いても聞いてももう私はだめなのでしょう。何が何だかさっぱりわかりません。」

甲 「よくわかりました。あなたは、信仰生活といえ、たいへん変わりはてた美しいものだと思つていられますね。いつもありがたくて、法悦にみちて、ちつとも悪い心をおこさないで……」

乙 「そう思っています。みなさまのすがたを見れば、そのように見えるのです。私もそうなりたいのです。」

甲 「私はあなたに申し上げたいと存じます。私どもが道を求めさせていただくには、予想を持たないことです。名物にうまいものなしと言います。まだ見ぬ宮島でもあまり大きな期待を持ちすぎるので、見てびっくりして力ぬげがします。早くから、信心いただいたら、清い心に、美しい法悦にと、そんな予想をたてておいて、その予想したわなに自分をひき込もうとあせつていなさるのです。それですと、とんでもない邪道に道草を食つていることになりす。信仰生活とは、よそ行きのつくろうたすがたではなくて、つつんでいた魂をなげ出したすがたです。」

乙 「けれども私は、この汚い心、暗い生活にたえられないのです。」

甲 「だれでもが陥りやすいことでもあります。予想なく聞かしていただきましょう。信ずるということが根本であつて、よろこびや信後生活は自然にそれから導かれるのであります。」

乙 「その信ずるといふことです。どう信じたらいいのですか。」

甲 「信ずるといふことは思いかためることではありません。真宗には如来を信ずるたつた一つの正しい方法が示されてあります。それは大経の下巻に示されてあります。『聞其名号信心歓喜』——其の名号を聞いて信心歓喜する——それでありす。真理は正しい方法によつてのみわれらに示されます。そのたつた一つの方法が『聞其名号信心歓喜』であります。あなたは、聞其名号をぬきにしてというよりは、あまり眼中におかないで、信心歓喜に力を入れていたのでありませんか。」

乙 「まことに言われて見ればそうなつていました。いいえ、私は信心をいただくためには、名号を聞かねばならぬと、信心をこしらえるための手段に名を聞いていたのです。」

甲 「そこです。きわどいところで、大切なものを見失い、大きな誤におちていなさるのです。聞其名号と信心歡喜を別ものにして、信心の手段に名号を聞くという考えが間違っているのです。聞其名号、名号のおいわれを聞くままが信心歡喜であります。真に名号を聞くこと、それ自身が信心歡喜であります。それなのに信心歡喜をつくることにうき身をやつして、名号を聞くことをおろそかにしては本末転倒であります。」

乙 「しかし私はみ名については聞かしていただいているつもりですが。」

甲 「聞いてはいなさるが、しかしまだ真に聞いてはいなさらないのです。聞くことと信ずることは別ではないのです。聞いたままに開けるのが信です。」

乙 「では何も添えさえしなければ、いいのですか。」

甲 「それも一つのはからいです。そんな、はからいも入れないのです。」

乙 「どうするのですか。」

甲 「南無阿弥陀仏においてはほかに信心はないのです。蓮師は『されば南無阿弥陀仏の六字のころは一切衆生の報土に往生すべきすがたなり。このゆえに、南無と帰命すれば、やがて阿弥陀仏のたすけたまえるころなり。』と釈されました。『南無とたのみ衆生を阿弥陀仏のたすけますます道理』ともあります……。その南無は私の自力ではなくて、如来の勅命そのものです。念ずる心も信ずる心も如来の廻向であります。南無阿弥陀仏においては信心はないのです。」

乙 「では南無阿弥陀仏のなかになにもかも……。」

甲 「そうです。そのまま助かるのです。現実のままで助かるのです。」

乙 「そのまま……それがわかりません。」

甲 「よくきれる刀を勅命とします。刀をたてられたままで斬られたのです。はたらく力だけいいのです。仏の大悲と機の信心と体が別ではありません。名号を聞いたままです。どんな悪人でも、ばか者でも。」

乙 「では、よろこぶ者が助かるのではないのですか。」

甲 「勅命以前に何の用意もしないのです。天地間ただ、仏心のみがものをいうのです。ありのままがまんまにたすかるから……機法一体仏凡一体のおたすけです。」

乙 「ああ……南無阿弥陀仏……。」

甲 「言うべき言葉がないのです。煩惱のこの身の上に仏を見ようとするのではなくて、無限絶対の大悲の中に私を見させていただくのです。」

乙 「ありがとうございます。」